

非公開マイクロデータとの日々

大野由香子

もうかなり昔のこととなるが、大学院生時代、指導教授の研究アシスタント(RA)として、アメリカ政府センサス局の編集する非公開マイクロデータを使うことになった。アメリカに渡って3年目、コースワーク中心の生活から一転、実証研究に触れる事になったが、何より新鮮だったのは、データ利用の為のボストン通いである。私が大学院生活を送ったブラウン大学は、アメリカ東部の町、プロビデンスの丘の上にある。コースワークの2年間、その丘から「下界」に下りた事はほとんどなかった。ボストンまでは、1時間強。90年代後半、まだ荒んでいたプロビデンス中心部から、通勤列車やバスで通い始めた。

センサス局の非公開マイクロデータは、経済センサスで収集される個々の事業所の詳細情報だ。それらの情報は地域別、産業別に集計され、広く利用されるが、集計データでは、事業所単位で存在した情報が埋没し、詳細な研究が妨げられる。それ故、匿名性確保のルールを何重にも課した上、センサスセンター内での作業が一部、許可される。研究者はプロポーザルが通るまでの当時は半年から1年以上にもなる長い待ち時間は勿論、センサスのデータのクオリティアセスメントの義務を負い、安くない使用料を研究費から割り、アメリカにいくつもないセンサスセンターに通うのだ。研究成果を発表する際は匿名性の維持を証明する書類作成にも時間をとられた。RAにも勿論、ルール厳守が課せられる。私の初ボストン行きは指紋押捺の為となり、数カ月後、バックグラウンド調査が完了して、漸く作業を始められた。

初めは楽しいボストン通い。朝食持参で列車に乗り込んだ。当時、ボストンのセンサスセンターはショッピングモール **Copley Place** にあった。他の大学院生と同様、研究アシスタントと RA からのみの薄給な大学院生にモールは本来の意味をもたなかったが、センサスセンターでの作業特有のストレスを発散する場となった。センターでの分析は、システムに声援を送りたくなる程遅かった。何故もっと良いシステムを入れておいてくれないのか、、、。周りからも溜息が聞こえた。だが厳密には、大規模データ処理には不十分なシステムだったという方がフェアな表現かもしれない。やがてこちらも賢くなり、いくつものコマンドを処理するプログラムを作り、完了を待たずに帰宅し、翌朝結果を回収した。その後、指導教官を共にするジムとモハammadも加わった。3人とも RA の後、博士論文そして卒業後の研究にもセンサスマイクロデータを続けて使うことになった。物理的、時間的、金銭的使用コストは高いが、やはり貴重なデータだったのだ。

3人寄れば文殊の知恵。博士論文を早く完了し、職を得ねばならない我々にとって、ボストン通いの効率向上は必須だった。二人が加わり、車が導入された。ガソリン代も馬鹿にならないが、夜遅くまでの作業に車は欠かせない。後に私も中古車を譲り受けた。ジムはボストンの一方通行、私は混雑するフリーウェイ**I95**の下道に精通し、モハammadは深夜まで作業して他に残っている者を連れて帰った。

あるとき大雪が降った。昔からのボストンっ子のジムも車を置いて帰ることにし、皆で最終の通勤電車に乗った。マサチューセッツ州の通勤電車は当時、夜間はプロビデンスのあるロードアイランド州まで行ってくれなかった。それを見越してロードアイランド州に入る手前の駅、サウスアッテルボロの駅に車を停めていたモハマッドの車を当てにした。駅につき、モハマッドの車の雪を払った。だが、ドアが開かない、やっとのことで、ハッチバックがあき、そこから皆、乗り込んだ。それから数年後、我々は卒業し、私はシカゴ、モハマッドはドバイに移り、ジムはなんとセンサス局で働くことになった。プロビデンスーボストンの往復の日々は終わったが、今も3人の交流は続く。

2012年6月